

まちを子供の遊び場に

次の時代を担う存在である「こども」を主体に取り上げてまちづくりを考えたとき、子供たちが生き生きと生活できる「まち」とは、子供が自由に遊べるまちではないでしょうか。そのためには、まちを生活の場として充実させることや、またハード面の整備だけではなく、地域社会づくり、地域住民間のコミュニケーションの充実が大切です。そのようなまちは、子供だけでなく大人にとっても、安全かつ快適な魅力あるまちではないでしょうか。

はじめに

従来のまちづくり（都市整備）において、主要なテーマとされていたのは、骨格施設である都市基盤整備（道路、鉄道、港湾、空港、公園緑地系）や都市設備系（上下水道、エネルギー、情報の供給全般）などの再編整備でした。その一方で、物の豊かさから心の豊かさへ志向が移り、ハード面の整備だけでなく、ゆとりや潤いなどのソフト面を重視した、自然環境や景観、デザインなどに考慮した整備も全国規模で行われるようになってきました。

現在、こうした中であって、本当の意味でまちの魅力を高め、生活の質を豊かにする「まちづくり」というものを、再び考え直す時期にきているのではないのでしょうか。

まちづくりには、住民や行政、企業などが一体となった活動が重要と考えられますが、やはりまちづくりの主演はそこで生活する「住民」です。そこで、その住民の中でも、次の時代を担う存在である「こども」を主体に取り上げてまちづくりを考えていきたいと思えます。果たして、子供たちが生き生きと生活できる「まち」とは一体どんなものなのでしょう。

子供が育つ生活環境

現在の子供を取り巻く生活環境は、全ての地域がそうとは一概には言えませんが、コンクリートやアスファルトに囲まれた自然の少ないまちがほとんどです。これは子供にとって決して快適なものではありません。また一歩家の外に出ると、自動車の危険や不審者等の心配などもあり、親は子供を守るため常に注意を払わなくてはなりません。さらに、現在は核家族化もすすみ、親の責任や負担は増す一方です。

そのような状況でも、子供同士がコミュニティーの中で親の存在を気にすることなく、疲れるまで遊べる環境は大切です。何故なら子供は遊びを通し生活を学び、成長していくからです。またそういった子供が自由に遊べる場の存在は、子供だけでなく親にとっても大変重要なものになっています。

子供の遊び場

子供の遊び場といえば、まちにあるいくつかの公園を思い浮かべますが、色々な遊具のある公園や、散策や景観を重視した遊具のない公園など、一言に公園といっても様々なものがあります。それらの中で、子供が生き生きと遊べる公園は一体どれくらいあるのでしょうか。

一部の地域では、自由に遊び、自分の責任でもって色々な遊びができる遊び場があります。ここでは、子供同士で小屋をつくったり、飯盒でご飯を炊いたりして遊んだりします。さらに、そこにはプレーリーダーと呼ばれる大人がいて、子供と一緒に道具を用意したり、遊具を作ったり、子どもたちの相談にのったり、また遊び場の管理を行ったりします。しかし、ほとんどのまちはこのような遊び場はなく、特に都市での子供の遊び場はとても少ないのが現実です。

まちを子供の遊び場に

公園は確かに子供の遊び場であることは間違いありませんが、果たして、子供は公園だけで遊べばよいのでしょうか。先にも述べたとおり、子供が自由な動きの中で生活を学び、子供同士や地域社会との関わりをもっていくためには、まち全体、生活空間の全てが遊びを許容できる場所であることが望ましいと考えられます。実際、子供の遊ぶ場というのは、地域にとってかけがえのない中核施設となり、子供だけでなく、若い親が地域社会と交流を図れる場、育児や生活上の困ったことなどを他人（他の若い親や、ベテランの親またはお年寄りなど）と相談できる場にもなるからです。

しかし、現在のまちの生活環境には、子供の自由なふるまいを制約する要因がいくつか存在しています。その一つに、子供の安全を図るといふ安全管理の責任問題があり、さらに社会自体が子供の気ままな行動を許容できないという現実があります。それでは、子供が自由に遊べる環境を確保するには何が必要なのでしょうか。

地域社会づくり

子供が自由にまちで遊ぶためには、まちを生活の場として充実させることが大切です。例えば、まちの歩行者優先の環境を拡大するため、まちの一部に共同駐車場などを設置して、中心商店外や近隣地区まわりを歩行者の空間にすることなどがあげられます。つまり、子供をはじめ高齢者や障害者などの生活行動速度やその不安定性を配慮し、子供をはじめとする住民が、より安全性や快適性を得るための整備を積極的に行っていく必要があります。

またハード面の整備だけではなく、地域社会づくり、地域住民間のコミュニケーションの充実も大切です。住民同士が顔見知りになることで、地域の目がいざというときの防犯力(不審者の排除や空き巣対策)となったり、災害時の地域での防災力(救助活動など)にもつながります。地域社会のつながりが生まれることで、そのまちの中で子供は安心して遊ぶことができ、また子供だけでなく大人も安心して生活を送れます。

まちづくりにおいて、今後さらに地域社会づくりが大切になってくるのではないのでしょうか。というのも、都市のインフラストラクチャーは、空間的に蓄積された都市のハードな施設だけでなく、社会的に蓄積されたソフトな地域の人間関係にもあるといえるからです。

地域社会 = (イコール) 都市基盤と捉え直したまちづくりを、ハード面はもちろんソフト面も行っていけるかどうか、今後のまちづくりのテーマなのではないのでしょうか。

おわりに

今回は、「こども」を主体にまちづくりを考えてみましたが、何故、子供をテーマに選んだかという、たまたま私個人が2歳(もうすぐ3歳)の娘をもつ母親だったからです。「はじめに」では一応もっともらしいことを書いてはいるのですが、つまり子供がいなかったときの生活と子供が生まれた後の生活が劇的に変化してしまったことが一番の理由です。今の私にとって魅力あるまちとは、子供を安全かつ快適に育てられるまちであり、そのためには、まちの生活の場としての機能の充実や、地域社会のつながりは大切なものです。

現実には、まちには子供以外にも、大人や高齢者、障害者、学生、外国人など、多種多様な人が暮らしています。彼らにとっての魅力的なまちの姿というのは、それぞれ多種多様なもので、今後のまちづくりにおいても大切なテーマになっていくのでしょうか。ただ確かなことは、まちを魅力あるものにするのは、そこで生活する住民の力が必要だということではないのでしょうか。

参考文献

「まちづくり読本 こどもとまちづくり」こどもまちづくり研究会 風土舎

「なんでこんなに遠慮しなきゃならないの 160人のお母さんの声」矢郷恵子 株新読書社

「特定非営利活動団体 日本冒険遊び場づくり協会 HP」 (<http://www.ipa-japan.org/asobiba/top.html>)